

東日本大震災の被災者における 使命感の構造—文献事例の内容分析—¹⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科 相川 康弘²⁾

筑波大学人間系 松井 豊

The sense of mission within victims of The Great East Japan Earthquake: A content analysis study of victim statements

Yasuhiro Aikawa (*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Otsuka, Bunkyo 112-0012, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

We conducted an exploratory investigation into the sense of mission towards the incident and the behavioral and psychological processes of individuals embracing a sense of mission through content analysis of texts written by victims of The Great East Japan Earthquake. Sixty-nine texts were sampled from eight volumes of reports and direct memorandums from victims of the disaster-stricken region. The results of content analysis, used to classify and categorize the victim's statements, classified 10 texts under a category relating to sense of mission and assigned 13 texts to a category relating to the behavioral and psychological processes of individuals who embrace a sense of mission. Through multiple correspondence analysis, the categories were divided into four groups: namely, psychologically resonant, compassionate towards victims, duty accomplishment, natural performance.

Key words: Great East Japan Earthquake, mission, victims, self-transformation

問題と目的

本研究では、使命感が生起する状況及び使命感を抱いた人々の心理過程と動態を探索するために、東日本大震災において、使命感が生起した現場に身を置いていた人々の記録を分析する。

使命感に関する研究の動向

使命感は心理学、社会学、教育学、宗教学に関係が及ぶが、研究論文だけではなくエッセイや啓蒙書

で取り上げられることも多い。心理学研究による知見が少ないために、本論文では先行研究の対象を心理学以外にも拡張して捉え、使命感について概観する。

使命感を論考する上での視点は以下の3点とした。第1は「生きがいと実存」の視点、第2は「社会心理学」の視点、第3は「被災者・遺族の心理」の視点である。

1. 生きがいと実存の視点

使命感は「生きがい」や「実存」の視点から、神谷(1980)やフランクル(1985)が論じている。

神谷(1980)は、精神科医としてハンセン病の長期病棟で臨床を行った経験から、「使命感に生きるひとがーばん生きがいを感ずる人種」と述べてい

1) 本研究は、平成26年度筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻カウンセリングコースにおける修士論文を加筆・修正を加えたものです。

2) 現所属：法務省東京拘置所 就労支援スタッフ

る。さらに、このような人々には「生きていることへの責任感」と「自分が果たすべき役割の自覚」があると説明している。その上で、使命感をもたらすものとして「課せられ意識」の存在を指摘した。「課せられ意識」とは、「使命を課せられているという意識」のことで、「課する者」とは「課題を与える者」として、「自分自身、現実の他人、集団、故人の遺志、根源的な人生そのもの、神や天と名づけるもの、漠然とした超絶的な力や意思」（神谷，1980）としている。この「課せられ意識」を具象的、擬人的に体験するのが、人間であると神谷は述べている。

フランクル（1985）は、心理療法において、「精神的なものからの呼びかけ」を重視した。この呼びかけに回答する「責任性」が使命感に他ならず、回答する必要性を臨床的に示そうと試みた。この回答は実存的対話としてフランクル自らが考案・実施した心理療法（ロゴセラピー）の中核に据えられた。さらに、使命が個人的に編成され天職になる時に、心理療法的・精神衛生的価値を有するとしている（フランクル，1985）。フランクルは、人生において使命を持っているという意識によって、外的な困難や内的な煩悶に打ち克てると述べている。

第1の視点における論考では、使命感は人びとに「生きがい」をもたらし、困難や苦悩に対処する力を生じさせるものと捉えていた。この視点では、使命感における「課せられ意識」や「精神的なものからの呼びかけ」とそれへの回答（責任性）が重視されていた。

2. 社会心理学の視点

社会心理学における使命感の研究は、「職業威信」が主要な分析対象となっている（岡本・堀・鎌田・下村，2006）。「職業威信」の概念は、各職業が本来もっている職責や使命との関連で定義されている。岡本ら（2006）は、「たとえば看護師であれば、看護師が本来なすべき職責・使命がある。こうした職責・使命をどの程度重く考えるかには個人によって差がある」と捉えている。岡本ら（2006）は、消防官1,715人を対象にした調査により、「職業的自尊心」から「職業的使命感」に関する心理構造を明らかにした。同研究では、「職業的使命感」を生み出す心理的個人差を「職業的自尊心」であると規定し、その「職業的自尊心」を「職能的自尊心」と「職務的自尊心」の二次元モデルで説明している。「職能的自尊心」は、難しい技能を要求される職業・職種に対応する一次元概念であり、「職務的自尊心」はそれぞれの仕事の社会的責任や社会的貢献度の自覚によりもたらされると理論化している。

第2の社会心理学における視点では、「職業的使命感」という限定的な対象となっているが、使命感が「職業威信」や「職業的自尊心」といった自覚や認識から構成されることが明らかになっている。

3. 被災者・遺族の心理の視点

使命感を抱いた行動は、災害や事故に遭遇した際に多く現出すると推定される。そこで、災害時に見受けられる心理現象を扱った研究を紹介する。

（1）災害ユートピア・救助者の心理

精神医学者のラファエル（1995）の復興曲線における「ハネムーン」期には、災害に襲われたとき人々が恐怖を抱いて無力な存在となったり、パニックに陥ったりするのではなく、むしろお互いに助け合ったり相互連帯感が強まったりする段階がみられる。ソルニット（2010）は、災害時の人々が相互扶助的な行動をとる現象を「災害ユートピア」と呼んでいる。災害ユートピアにおいては、職業に関係なく、隣人を救うために行動することが要求される。

Oliner（2003）は、災害や事故でボランティアを含む救助活動をして活躍した214名に対するインタビューから、これらの人々が使命を達成した動機を探索している。Olinerは、動機として次の2点を示している。第1は被災者や事故の犠牲者への同情、第2は社会的責任感である。第1の同情に関しては、「人は他者の悲劇から離れて歩いて生きていくことはできない」と述べている。加えて、救助活動をする人々は本能的・衝動的に使命の行動を起こすとしている。第2の社会的責任に関しては、両親や育った環境からもたらされる規範意識や道徳観念が動機となっていることを説明している。さらにOlinerは、「神が望まれたから、溺死しそうな人を救った」と話している人の事例を示して、使命達成の動機として宗教的な理由も挙げている。この事例には神からの「課せられ意識」がみられた。この他Olinerは、使命達成の動機として自己効力感、人を助けたら自分も助けられるという互惠主義、人を思いやる倫理観、リスクを求める冒険心を挙げている。

（2）自己変容

災害時に見られる自己変容の中で、最近注目されているのが、「Post Traumatic Growth」（心的外傷後成長）（以下PTGと記載）である。PTGとは「危機的な出来事や困難な経験における精神的なものがきや闘いの結果生じる、ポジティブな心理的変容の体験」（Tedeschi & Calhoun, 2004）と定義される。

宅（2014）はTedeschi & Calhoun（2004）による分類に従って、PTGを次の5つの領域に分けて説

明している。第1の領域は「他者との関係にまつわる人間としての成長」、第2の領域は「新たな可能性」、第3の領域は「人間としての強さ」、第4の領域は「精神的な変容」、第5の領域は「人生に対する感謝」である。

宅は、「同化」と「調節」の概念を用いて、PTGは「同化」ではなく、「調節」によって大きな衝撃に対応していくと理論化している。「同化」とは「自分自身を変えることなく、外から要求されることを、自分がすでに持っている枠組みにあてはめて、とらえていくこと」であり、「調節」とは「自分自身の考え方や枠組みそのものを変えて、外からの要請にこたえていくこと」である。PTGでは出来事が起きる前の状態に戻ろうとするのではなく、元の何かを超えて、新しいものや別のものに根本的に変わるという変化が含まれていると指摘している。

安藤(2015)は、外傷後の成長の特徴の1つに、「想定世界観の崩壊」を挙げている。災害や事故に遭遇した人々は、外傷経験によって今まで抱いていた世界観が壊され、何らかの対応を迫られる。その際に、成長を伴って適応していければポジティブな変化(PTG)となり、不適応的であればネガティブな変化となる。

(3) 遺族の心理

悲嘆研究においては、死別を経験した人々が故人と心の交流をすることが知られている。この現象は、Klass, Silverman, & Nickman (1996) が Continuing Bonds Theory (絆の継続理論)として理論化している。死別後に、故人との関係性を断絶させるのではなく、故人と心の対話をすることで新しい関係性を育むという理論である。災害時には、故人との心の交流を通じて、何か自分にメッセージが与えられたと感じた人々がいると想定される。

また、災害や事故で死別した遺族が示す行動に「遺志の社会化」がある。遺志の社会化とは、「遺族が故人の遺志を想定し、それを実現する方向で行動すること」(野田, 2014)である。「遺志の社会化」は、日航機墜落事故の遺族に面接調査をした結果から野田が提唱したもので、絆の継続理論と類似の概念である。安藤(2015)によれば、遺族は故人の思いを目的化し、その達成に努力することで自己価値を高められるとしている。遺志の社会化の過程には、故人の思いの実現と遺族の目標達成という二重の意味で「人生の意味」を作ったと、安藤は考察している。

第3の視点では、被災者・遺族の心理の視点から得られた知見を概観した。災害時には、援助行動などの愛他行動がみられ、災害ユートピアが現出する場合があること、被災者への同情や社会的責任から

救助活動をする人々が存在すること、災害や事故に遭遇した人々の中には、自分自身の考え方や枠組みそのものを変えて、外からの要請にこたえていく作業を通じて自己変容を遂げた人々がいること、故人との絆の継続を保ち、遺志の社会化を示した人々がいることが示された。

このような災害時の心理や行動及び自己変容は、使命感と関連があると推察される。

使命感の定義

以上、3つの視点から使命感に関する論考を取り上げたが、使命感そのものを対象とした心理学的研究は少ない。使命感という言葉は日常的に使用されているにもかかわらず、とらえどころがないイメージがある。本研究では、この現状を踏まえて、使命感の辞書的な定義から内容分析を行った。

広辞苑(新村, 第六版)では、使命は「①使として命じられた用向き。使いの役目。②使者。③自分に課せられた任務。天職」と説明され、使命感は「与えられた任務をやり遂げようとする責任感」と説明されている。広辞林(三省堂編修所, 第六版)では、使命は「①使者として受けた命令。②与えられたつとめ。課せられた任務」と説明され、使命感は「どうしてもその任務を果たさなければならないという自覚」と説明されている。日本国語大辞典(佐藤, 精選版第2巻)では、使命は「①使者として命ぜられた命令や用向き。使者の役目。②使者。③与えられた重大な任務。自分に課せられた尊いつとめ。天職」と説明され、使命感は「与えられた任務をなしとげようとする気概や責任感。特にその任務に格別の意義と誇りをもってあたる場合の感情をいう」と説明されている。

辞書の定義からは、共通要素として、第1に「与えられた」、第2に「果たさなければならないという自覚」、第3に「やり遂げようとする責任感」の3件を抽出することができる。本研究では、これらを「使命感の3つの要件」として設定した。第1要件は「任務が与えられたと認知すること」、第2要件は「任務を自分が果たさなければならないと自覚すること」、第3要件は「任務遂行の責任感を持つこと」である。これらの3つの要件をいずれか1つ以上を満たす行動を、本研究では使命感に基づく行動と捉える。

使命感の定義は「与えられた任務を自分が果たさなければならないという自覚と責任感」とする。

目的

以上の研究動向を踏まえて、本研究では、東日本

大震災の被災者を対象にした文献の内容分析によって、使命感の生起状況、使命感を抱いた人々の行動や心理過程、自己変容の様子を探索することを目的とする。

方 法

分析方法

東日本大震災に関するルポルタージュ及び被災地にいた直接の被災者の手記の中で、使命感を抱いた人々を対象にした。次に、対象各人の言説及び文脈の単位（以下「テキスト」と記載）を研究の目的に則して抽出した後、KJ法を援用してカテゴリを生成し、内容分析を行った。分析に当たっては、テキストを分類して、職業別に多くの事例を収集した。最後に、カテゴリ間の関連及び職業とカテゴリとの関連を探索するために、数量化理論第Ⅲ類（以下、「数量化Ⅲ類」と記載）で解析を行った。

対象文献・事例

対象とする文献は、第1に「被災者本人が証言しているもの」、第2に「被災者本人を対象とした取材に基づいているもの」、第3に「信頼性の高いもの」を基準として選定した。選定した文献は、Table 1に示す8冊であった。事例の選定にあたっては、「使命」と「使命感」の言葉が記載されたもの、使命感の3要件のいずれかを満たす記載があるものとした。3要件に基づく選定では、第1要件では「新たに任務が与えられたこと」、第2要件では「任務を果たさなければならぬ自覚と状況」、第3要件では「任務遂行の責任感の強さ」が判断材料となった。

対象事例は、合計で69事例となった。性別では、「男性」57事例、「女性」12事例であった。職業別で

は、「医者」6事例、「警察官」23事例、「自衛官」9事例、「自治体職員」20事例、「社長・その他」11事例であった。

分析時期

2011年7月24日～2014年3月11日。

結 果

カテゴリの生成

使命感に関するカテゴリ10件、その他のカテゴリを13件生成した。カテゴリの生成にあたっては、対象事例のテキストに見出しをつけ、筆者2名で分類と整理を行った。

使命感に関するカテゴリ群

使命感の3要件に対応するテキストからカテゴリを3件生成した（Table 2）。

「使命感①」のカテゴリは、第1要件に対応するもので、「今回の震災を契機に新たな任務が与えられた状況」における使命感である。「社長・その他」の人々が多く該当した。

「使命感②」のカテゴリは、第2要件に対応するもので、「任務が自分に与えられた状態を理解して自覚している状況」における使命感である。震災前から就いていた職業の特性から、発災時には自分の任務を十分に自覚しており、震災を契機に使命感を新たにしたり人々で、「警察官」が多く該当した。

「使命感③」のカテゴリは、第3要件に対応するもので、「任務を成し遂げたいという思いが強い」人々で、「自衛官」が多く該当した。

次に、使命感に緊密に関係するカテゴリとして、「課せられ意識」「自然な役割意識」「天命の意識」の3件が生成された（Table 2）。

Table 1
対象文献と対象事例

選定文献			対象事例	
文献名	著者	発行年	事例数	職業・役職
無から生みだす未来	神谷隆史	2013	10	社長・団体役員
救命	海堂尊	2014	5	医者
使命	岩手県警察本部	2013	14	警察官
あなたへ	講談社ビーシー	2014	9	警察官
自衛隊員たちの東日本大震災	大場一石	2014	9	自衛官
自治体職員の証言と記録	自治労連	2014	20	自治体職員
6枚の壁新聞	石巻日日新聞	2011	1	社長
石巻災害医療の全記録	石井正	2012	1	医者

「課せられ意識」のカテゴリーは、「『自分自身』『誰か』『何ものか』」等がメッセージや任務を自分に課していると感じている状態の意識である。「社長・その他」の人々が多く該当した。

「自然な役割意識」のカテゴリーは、使命感の3要件のいずれかに該当するものではあるが、本人が「本能」「自然の流れ」といった別の言葉で表現しているものである。該当した5事例のうち4事例が「医者」であった。

「天命の意識」のカテゴリーは、使命感の3要件のいずれかに該当するもので、「課せられ意識」が強くなり、持続性がある使命感の記述があるテキストから生成した。「社長・その他」の人々が多く該当した。

さらに、使命感を抱いた人々の行動に関するカテゴリーとして、「職業的使命感」「社会的使命感」「一時的使命感」「持続的使命感」の4件が生成された (Table 2)。

「職業的使命感」のカテゴリーは、「与えられた任務を職務として自覚し、職務遂行の責任感を抱いている状態」での使命感である。「警察官」が多く該当した。

「社会的使命感」のカテゴリーは、「職業・職務に関わりなく、自分が行うべき任務として自覚し、職務遂行の責任感を抱いている状態」での使命感である。津波で壊滅した町の復興や震災の伝承活動など、必ずしも自分の仕事とは直接関係なくともとった行動である。「社長・その他」の職業に多く見られた。

「一時的使命感」のカテゴリーは、発災から1年以内になされて、その後消滅した使命感であり、数時間で完了した行動もある。救命活動や援助行動などのように、目前に差し迫った状況において生起することが多かった。「警察官」や「自治体職員」が多く該当した。

「持続的使命感」のカテゴリーは、発災から1

Table 2
使命感に関するカテゴリー群

カテゴリー名	代表的なテキスト	事例件数
使命感① (任務の認知)	「町の惨状を見て、これからつくる女川は津波で一人の命も落とさない町にしなければならない」と思ったのです。	7事例 (社長・その他5, 医者1, 警察官1)
使命感② (任務の自覚)	自分は困っている人を助けたいがために警察官になったという初心が頭をよぎり、「絶対にこの人を助ける」という思いが込み上げた。	14事例 (社長・その他2, 医者3, 警察官6, 自治体職員3)
使命感③ (任務遂行の責任感)	泥だらけになっても、ずぶ濡れになっても、どんなところでも行くつもりでしたし、体力が続く限り任務にあたる覚悟でした。	11事例 (医者1, 警察官2, 自衛官5, 自治体職員3)
課せられ意識	震災から3ヶ月後、ガレキの中から看板が見つかりました。分厚い一枚板に「リアスの詩 農林水産大臣賞受賞マルキチ阿部商店」という文字が刻まれています。その看板は「頑張って、やれ (再建しろ)」と伝えたいんだな、と受け止めました。	6事例 (社長・その他4, 医者1, 警察官1)
自然な役割意識	呆然自失としながらも白衣を纏ってしまうんです。医者の本能ですかね。	5事例 (医者4, 警察官1)
天命の意識	「残してやったから、会社の発展ではなく、町の復旧、復興に力を尽くせ」という特別なメッセージとして、私は受け取りました。	5事例 (社長・その他4, 医者1)
職業的使命感	襲来が予想される津波のため一刻も早く大船渡警察署に戻り、災害警備につかなければと使命感がわいてきて行動した。	14事例 (社長・その他2, 医者2, 警察官9, 自衛官1)
社会的使命感	犠牲になった市民の方々、そして職員のためにも「絶対に負けない」という気概を持ち続け、この震災を風化させてはいけないと思う。それが生き残ったわれわれの使命なのである。	11事例 (社長・その他5, 警察官5, 自治体職員1)
一時的使命感	徐々に火が迫ってくるなかで、彼らの気持ちを奮い立たせたのは、警察官としての使命感がなく、「声が聞こえてきた以上、必ず助ける」といった気概だけだったと思います。	11事例 (警察官8, 自治体職員3)
持続的使命感	東日本大震災警備に従事した警察官の1人として、この経験を後世に伝えていくことが、私に課せられた使命の1つであるとの気持ちを抱き、これからの警察官人生を歩んでいきたい。	9事例 (社長・その他5, 警察官2, 自治体職員2)

年を経過しても持続されている使命行動である。「社長・その他」の職業に多く見られた。

その他のカテゴリー群

使命感を抱いた人たちの心理過程を表現している

カテゴリーを13件生成した (Table 3)。

「自己変容」のカテゴリーの中には、震災前と後で、「自分が変化した」という内容のテキストが9事例あった。「社長・その他」が多く該当した。

「自己目的な思い」のカテゴリーの定義は、「報

Table 3
心理過程のカテゴリー

カテゴリー名	代表的なテキスト	職業別事例件数
自己変容	* 思えば震災から自分の考え方は大きく変わりました。震災前は問題があってもあきらめていました。震災後は、問題があれば解決すればいい、解決することは無理ではない、と考えるようになりました。 * 自分はもともと怠惰で、真面目、勤勉、人を引っ張ることとは対極にある人間です。でもこれだけのことがあって、変わらないのは嘘です。	9事例 (社長・その他7, 医者2)
自己目的な思い	震災後に気持ちに大きな変化がありました。公務員である自分、保健師である自分、ぐうたらな自分、どんな自分でも正直に生きたいという思いを強くしたことです。明日がどんな一日になるかなんて、等しく誰にも分からないことですから、今日は自分に納得できる正直な自分でいようと思います。	3事例 (社長・その他1, 医者1, 自治体職員1)
遺志の受信・死者との交流	亡くなった人のために頑張ることが「供養」、亡くなった人々の魂を背負い女川のために頑張るって「流されたじいさんにほめられたい」と思っています。	8事例 (社長・その他6, 自治体職員2)
生かさぬ感覚	あの交差点で立ち止まらなかつたら、自分も確実に死んでいた。あとから考えればぞっとします。「生かされた」という思いです。	9事例 (社長・その他5, 医者2, 警察官1, 自治体職員1)
リセット・解放感覚	津波は「しがらみ」や「時代に合わないもの」も流してしまいました。リセットボタンを押してもらった。	4事例 (社長・その他4)
存在意義に悩む	もうバッジの仕事ではなくていいのではないか。どんな職種でも力になれる。「もう俺には政治家は無理」という気持ちで過ごしました。	7事例 (社長・その他3, 医者2, 警察官1, 自治体職員1)
任務を優先	隊員たちは家族のことが心配であっても任務優先と心得ており、それを口に出しませんでした。	6事例 (医者2, 自衛官4)
辛い気持	今回の災害派遣で、辛いと思ったことはなかったかと、いろいろな方から聞かれましたが、そのように思ったことはありません。	5事例 (医者2, 自衛官3)
被災者に報われる感覚	「ご苦労様です、がんばってください」とおにぎりを差し入れしてくれる。「何か困ったことがあればいつでも言ってくださいね」と声をかけてくる。自分たちが守っていると思っていた人たちに、実は自分たちの方が支えられていたのだと気付かされた。	9事例 (医者1, 警察官6, 自衛官2)
被災後の心的衝撃	翌朝、日の出前に女川の町に下りて行きました。あまりのことに、悲しさ、辛さを通り越して、呆然と圧倒されるだけでした。	7事例 (社長・その他2, 医者1, 警察官2, 自衛官2)
死を覚悟	うずくまって、「ああ、もう死ぬなあ」とあきらめ、目をつぶりました。	11事例 (社長・その他7, 医者2, 警察官1, 自治体職員1)
無念・無力感	次々と発見されるご遺体を見て、自分の無力さ、そして1人の命しか救えなかったという後悔の念にかられました。	9事例 (医者1, 警察官6, 自衛官1, 自治体職員1)
極限の疲労状態	朝まで働いてなぜこんなにしんどい思いをするのかと思います。悲惨きわまりないです。津波で助かったのに、仕事で死んでしまうのではないかと。	9事例 (社長・その他3, 医者1, 警察官3, 自衛官1, 自治体職員1)

酬を期待せずに活動そのものを楽しみを見出す特性をもつ状態」である。この思いを抱いた人々には「自己変容」が見られた。

「遺志の受信・死者との交流」のカテゴリーの定義は、「震災で亡くなった人たちの思いを自分に向けられたメッセージであると受け取り、心の中で死者とやりとりをして自分が果たすべきことを意識している状態」である。故人から「課せられ意識」を感じている人々で、「社長・その他」が多く該当した。

「生かされ感覚」のカテゴリーの定義は、「震災で生き残ったのは運命であると受けとめて、自分は『生かされた』『選ばれて残された』という感覚を持っている状態」である。「社長・その他」が多く該当した。

「リセット・解放感覚」のカテゴリーの定義は、「津波で人や家やモノなどが流されて喪失しつつも、リセットされ、解放されたという感覚」である。すべてが「社長・その他」が該当した。震災後は、津波による流出によって過去のしがらみが消滅して、新しい事に取り組む準備がなされた人々もいた。

「存在意義に悩む」のカテゴリーの定義は、「あまりにも大きな惨事に遭遇して、自分の無力感や後悔の念を感じている状態で、自分の存在意義そのものに疑問を抱いている状態」である。

「任務を優先」のカテゴリーの定義は、「家族の安否や心配をするよりも、第一に自分に与えられた任務を優先している状態」である。「医者」と「自衛官」が多く該当した。

「辛くない気持ち」のカテゴリーの定義は、「精神が高揚して休み無く仕事や活動を続けている時期で、過酷な状況にあっても大変と思わない状態」である。任務遂行の責任感が強い人々に見られ、「医者」や「自衛官」が多く該当した。

「被災者に報われる感覚」のカテゴリーの定義は、「被災者から感謝されて嬉しい気持ちを抱き、被災者の姿からエネルギーをもらっている状態」である。「警察官」が多く該当した。

「被災後の心的衝撃」のカテゴリーの定義は、「被災直後の衝撃的な気持ち」である。「呆然・絶望・恐怖・寂しさ」といった複数の感情が併存していて、単一の気持ちとして表現できないカテゴリーである。

「死を覚悟」のカテゴリーの定義は、「震災直後に自分自身の死を感じ取った状態」である。「社長・その他」が多く該当した。

「無念・無力感」のカテゴリーの定義は、「被災者に対して、自分ができる仕事・やれる仕事の効果に

疑問を抱いている状態」である。過酷な被災状況で職務における成果を感じられずに抱いたネガティブな感情で、「警察官」が多く該当した。

「極限の疲労状態」のカテゴリーの定義は、「被災後の活動や仕事が過酷なために、肉体的・精神的に極度の疲労を起している状態」である。

カテゴリー間の関連

使命感の構造を探索するために、上記23件のカテゴリーを数量化Ⅲ類で解析をし、各カテゴリーに対して当てはまる事例は1とし、当てはまらない事例は0として分析を行った (Figure1)。第1軸の固有値は0.73、第2軸の固有値は0.58、第3軸の固有値は0.47であった。

Figure1の第1軸0.5以上第2軸-0.1以上 (図の右上)の領域には、「使命感① (任務の認知)」のカテゴリーを中心に「遺志の受信・死者との交流」「生かされ感覚」「天命の意識」「リセット・解放感覚」「自己変容」「自己目的な思い」「課せられ意識」「死を覚悟」「存在意義に悩む」「極限の疲労状態」「持続的使命行動」「社会的使命行動」が布置された。

第1軸-0.1以下第2軸-0.5以下 (図の左下)の領域には、「使命感② (任務の自覚)」のカテゴリーを中心に「被災者に報われる感覚」「職業的使命行動」「無念・無力感」「被災後の心的衝撃」「一時的使命行動」が布置された。

第1軸-1.9以下第2軸1.2以上 (図の左上)の領域には、「使命感③ (任務遂行の責任感)」のカテゴリーを中心に「辛くない気持ち」「任務を優先」が布置された。

第1軸-0.4以上0.1以下第2軸-0.1以上0.4以下 (図の中心付近)の領域には、「自然な役割意識」が布置された。

カテゴリーと職業との関連

数量化Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアを従属変数とし、対象事例の性別及び職業を独立変数として、分散分析によって平均値の差の検定を行った。その結果、性別には有意な差がなかった。職業は、1%水準で有意であった (Table 4)。そこで、第1軸と第2軸の平均値を基にそれぞれの職業を布置した (Figure1)。

「社長・その他」は、「使命感①」「課せられ意識」「死を覚悟」「自己目的な思い」「存在意義に悩む」の近傍に布置された。

「警察官」は、「使命感②」「被災に報われる感覚」「職業的使命行動」「無念・無力感」の近傍に布置された。

「自衛官」は、「使命感③」「任務を優先」「辛い気持ち」の近傍に布置された。

「自治体職員」と「医者」は、「自然な役割意識」の近傍に布置された。

考 察

数量化Ⅲ類の結果から、全カテゴリーは4グループに分けることができた (Figure2)。この分類により、使命感を抱く人々の特徴が明らかとなり、使命感の構造の概要が示された。

第1群【震災共振群】

「使命感①（任務の認知）」のカテゴリーを中心

に布置されたカテゴリー群を第1群とした。Figure2の第1軸0.1以上第2軸-0.1以上 (図の右上)の領域である。第1群には、震災と共に心が揺れ動いて「自分のなすべきことが与えられた」と感じた人々がいたことから、「震災共振群」と命名した。「社長・その他」の職業の人々は、この群に含まれた。「震災共振群」には、全カテゴリーの半数以上の13件のカテゴリーが布置された。

「震災共振群」の第1の特徴として、「使命感①」のカテゴリーの近傍に、「自己変容」と「リセット・解放感覚」のカテゴリーが布置されていたことから、安藤 (2015) の「外傷後の成長プロセス」が存在したことが推定される。このプロセスとは、「想定世界観の崩壊」の後に新しい対応を迫られて成長

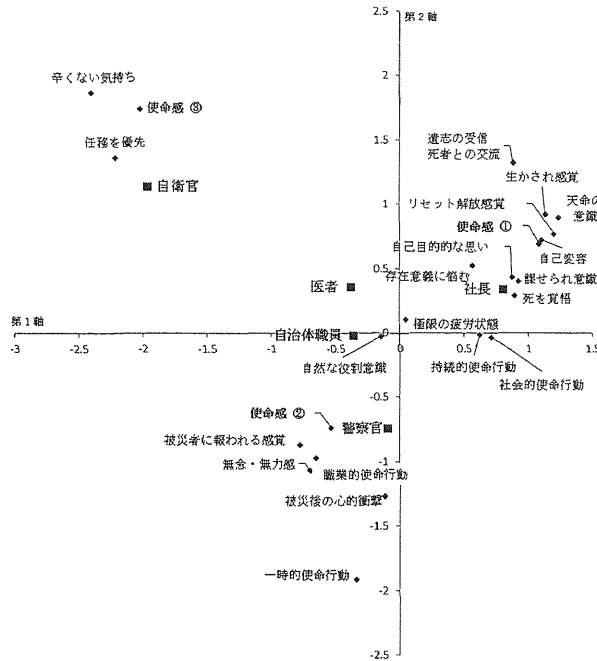


Figure 1. 使命感の構造の数量化Ⅲ類の結果

Table 4
職業別平均値の差の検定結果

		社長・その他	医者	警察官	自衛官	自治体職員	F検定
第1軸	n	11	6	19	7	16	F=12.39
	MEAN	0.81	-0.35	-0.13	-1.98	-0.32	df=4,54
	SD	0.44	1.18	0.65	0.61	1.1	p<.01
第2軸	n	11	6	19	7	16	F=5.12
	MEAN	0.35	0.38	-0.73	1.27	-0.02	df=4,54
	SD	0.56	0.80	0.83	0.91	1.60	p<.01

を遂げる過程である。宅(2014)のPTGにおける「調節」の概念も該当すると考えられる。

実際に、第1群に布置された「社長・その他」の職業の人々の中には、「考えや価値が大きく変化した」という言説が多く見出された。「自己変容」に関して、「社長・その他」のテキストに共通して見られた変化に、「以前と比較して解決志向が強くなったこと」が挙げられた (Table 3)。これは、PTGの下位概念である「新たな可能性」と「人間としての強さ」(Tedeschi & Calhoun, 2004) を獲得したためと説明できる。

「自己変容」のカテゴリの近傍には、「使命感①」があった。この結果は、「自己変容」を遂げた人々は「新たに任務が与えられた」と感じていたことを示している。この人々の多くは、「社長・その他」の人々であった。この人々の多くは、普段は使命感を意識することなく暮らしていたが、震災によって自己変容を起こして何らかの新しい任務を認めていた。

第2の特徴として、「課せられ意識」(神谷, 1980) の存在が挙げられる。「天命の意識」もこの群に布置された。第1群の結果から、使命感の生起には「課する者」からの命令に近いメッセージが重要な働きを果たしている。このメッセージをどのよ

うに受けとめるかが、使命感形成の分岐となると推察される。

さらに、「課せられ意識」のカテゴリの近傍には、「死を覚悟」と「自己目的の思い」のカテゴリが布置された。「課せられ意識」を抱いた人々は、同時に自分自身の死を意識した人々であり、その後は自分が納得のいく報酬を期待しない活動をした人々であった。

「天命の意識」のカテゴリの近傍には、「生かされ感覚」のカテゴリが布置された。これらはいずれも、自分の意志によるものではなく、運命や天と呼ぶものによってもたらされた感覚や意識である。

「震災共振群」には「遺志の受信・死者との交流」のカテゴリも布置されていた。生き残った者が、故人と共有する思いを目的として設定して、その実現のために生きていくという構図である。これも、「任務の認知」の形態の1つと考えられる。

第3の特徴として、「持続的使命行動」と「社会的使命行動」が布置された。自己変容を遂げた人々が、従来の仕事と関係なく震災で新たに与えられた任務を継続して行っていく事例が、「震災共振群」には見られた。「天命の意識」や「遺志」が強いインパクトをもって自分に任務を与えたという意識が、このような行動に駆り立てたと推察される。

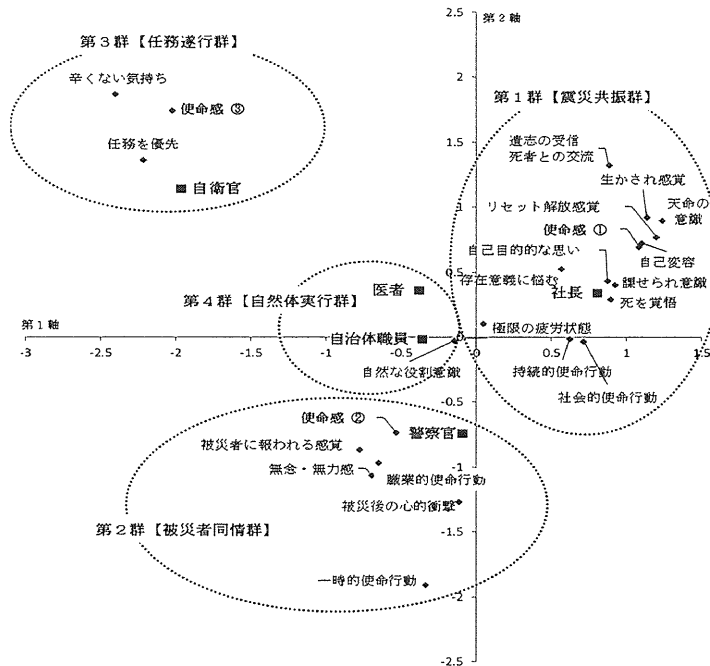


Figure 2. 4つのグループ (数量化Ⅲ類の結果)

震災共振群の中で使命感を抱いた人々には、多様な心理が生じていた。新しい任務を知り、行動していく過程には、死を覚悟したり、存在意義に悩んだりして自分自身を変化させ、課せられ意識を感じて持続的な社会行動へと突き進むといった劇的な物語があったものと推察される。

第2群【被災者同情群】

「使命感②（任務の自覚）」の 카테고리を中心に布置された 카테고리群を第2群とした。Figure2の第1軸-0.1以下第2軸-0.5以下（図の左下）の領域である。この群は、自分の任務を自覚して「被災者に何かをしてあげたい」という思いが強い人たちがいたことから、「被災者同情群」と命名した。この群には「警察官」と6件の 카테고리が布置された。この群に属する人々は任務の自覚が強く、「職業的使行動」が見られた。また、「一時的使行動」も付置された。これらの人々は、Oliner (2003) が示した被災者への同情から使命達成行動をとった人々と考えられる。

この群には「警察官」が布置された。本研究で扱った警察官も岡本ら (2006) の研究対象とした消防官と同様に、「職業的自尊心」が高い職業であると考えられる。岡本ら (2006) によれば、「職業的自尊心」は「職業的使命感」の規定要因であった。本研究においては、自分の仕事に誇りを抱いて職務に邁進した「警察官」の中に、使命感の自覚が強かった人々が存在した。このような人々の行動には、目前にさし迫った危機への対処行動や救命行為や援助行動があったものと推定される。

「被災者同情群」には、「被災後の心的衝撃」の 카테고리が布置された。災害に遭い呆然・絶望・不安・恐怖といったネガティブな感情と闘いながら、職務を遂行した人々が存在したことを示している。この人々は、被災者にとにかく何かをしてあげたいという思いが強く、成果が出ないと感じると「無念」や「無力感」を抱いたり、被災者に感謝をされると「報われた感覚」を抱いたりした。これらの人々は、被災者との心の結びつきが強かったために、心的衝撃を受けながらも任務を遂行したと推察される。

第3群【任務遂行群】

「使命感③（任務遂行の責任感）」の 카테고리を中心に布置された 카테고리群を第3群とした。Figure2の第1軸-1.9以下第2軸1.2以上（図の左上）の領域である。この群は、「任務遂行の責任感」が強い人たちがいたことから、「任務遂行群」と命名した。この群には、「自衛官」が含まれており、「使

使命感③」「任務を優先」「辛い気持ち」の 카테고리3件が布置された。

「使命感③」の 카테고리の事例は、「自衛官」5事例、「医者」1事例、「警察官」2事例、「自治体職員」3事例の11事例であり、多職種にわたっていた。「任務を優先」と「辛い気持ち」の 카테고리の事例を検討すると、「自衛官」と「医者」だけであった。何よりも任務を優先し、災害時の活動において辛いと感じなかった職業の人々は「自衛官」と「医者」であり、特に「自衛官」は際立っていた。

第4群【自然体実行群】

第1軸-0.4以上-0.1以下第2軸-0.1以上0.4以下（図の中心付近）の領域には、「自然な役割意識」が布置されたことから、この領域を「自然体実行群」と命名した。この群には、「医者」と「自治体職員」が含まれた。

「自然な役割意識」の 카테고리の事例は、5事例のうち4事例が「医者」であった。本研究の分析対象とした事例のうち、「医者」の事例総数は6事例であったので、「自然体実行群」の代表的職業は「医者」であると捉えられる。多くの「医者」が「本能」や「自然な流れ」として仕事をしたことがうかがえる。これは、Oliner (2003) が使命達成の動機として挙げた「本能的行動」に該当すると考えられる。

「医者」の事例の中には、「ことさらに使命感を意識しない」「使命感という言葉を使いたくない」といった言説があった。本人たちは「本能」や「自然の流れ」という表現を用いて、使命感という言葉を使用してはいないが、被災時の行動から元々備わっていた使命感が発露されたと推測される。この結果から、「自然な役割意識」は「使命感とは呼ばない使命感」として認識できた。そこで、本研究ではこの領域を独立した群として解釈した。

課 題

本研究は、漠然としたイメージで捉えられてきた使命感を探索した研究であった。特に、東日本大震災の被災者を対象に使命感を見出して論考する試みは、他に例を見ない。今後は、心理学的知見を蓄積していくために、面接や質問紙調査を実施してデータに基づいた実証的な研究の実施が期待される。

引用文献

- 安藤清志 (2015). 災害における「喪失」と社会モチベーション研究 Annual Report, 4, 35-43.
- Beverly Raphael (1986). *When Disaster Strikes: How Individuals and Communities Cope With Catastrophe*. New York: Basic Books. (ビヴァリー・ラファエル (1995). 石丸 正訳 災害の襲うとき みすず書房)
- 石井 正 (2012). 石巻災害医療の全記録「最大被災地」を医療崩壊から救った医師の7カ月 講談社.
- 石巻日日新聞 (2011). 6枚の壁新聞 石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録 角川マガジンズ
- 岩手県警察本部 (2013). 使命 岩手日報社
- 自治労連・岩手自治労連 (2014). 自治体職員の証言と記録 春山一穂 (監) 大月書店
- 海堂 尊 (2014). 救命 新潮文庫
- 神谷美恵子 (1980). 生きがいについて 神谷美恵子 著作集1 みすず書房
- 神谷隆史 (2013). 無から生みだす未来 PHP 研究所
- Klass, D., Silverman, P.R., & Nickman, S.L. (1996). *Continuing Bonds: New Understandings of Grief*. New York: Taylor & Francis.
- 講談社ビーシー (2014). あなたへ 講談社
- 野田正彰 (2014). 喪の途上にて 岩波現代文庫
- 岡本浩一・堀 洋元・鎌田晶子・下村英雄 (2006). 職業的使命感のマネジメント 新曜社
- 大場一石 (2014). 自衛隊員たちの東日本大震災 並木書房
- Oliner, S.P. (2003). *Do Unto Others: Extraordinary Acts of Ordinary People*. Boulder, CO: Westview Press.
- 三省堂編修所 (1987). 広辞林 第六版 三省堂
- 佐藤 宏 (2006). 日本国語大辞典 精選版 第2巻 小学館
- 新村 出 (1995). 広辞苑 第六版 岩波書店
- Rebecca Solnit (2009). *A Paradise Built in Hell*. New York: The Viking Press. (ソルニット (2010). 高月園子 (訳). 災害ユートピア 亜紀書房)
- 宅 香菜子 (2014). 悲しみから人が成長するとき 風間書房
- Tedeschi, R.G., & Calhoun, L.G. (2004). *Posttraumatic growth: Positive Changes in the after math of Crisis*. Psychology Press.
- Viktor E. Frankl (1946). *Aerzliche Seelsorge Verlag: Franz Deuticke, Wien*. (ヴィクトール・E・フランクル (1985). 霜山徳爾訳 死と愛 みすず書房)

(受稿10月30日：受理11月13日)